

門弟篇

映画文学人生論

0161) 贗作吾輩は猫である	内田百閒	吾輩は猫である
0171) うらなり	小林信彦	坊っちゃん
0181) 千鳥	鈴木三重吉	虞美人草
0191) 団栗	寺田寅彦	三四郎
0201) 煤煙	森田草平	それから

木曜日の午後三時からを面会日と定候

夏目漱石作五篇と何らかの関連がありそうな別の作者による五篇を読んでみた。

うらなり（小林信彦） 坊っちゃん

贗作吾輩は猫である（内田百閒）吾輩は猫である

千鳥（鈴木三重吉） 虞美人草

団栗（寺田寅彦） 三四郎

煤煙（森田草平） それから

『うらなり』は『坊っちゃん』の続篇、『贗作吾輩は猫である』は『吾輩は猫である』の続篇でいずれも漱石の死後の作だが、その他三篇は漱石の存命中に発表されたもの。『千鳥』と『団栗』は『ホトトギス』に掲載され、『煤煙』は漱石の推薦により「朝日新聞」に連載された。

『うらなり』と『贗作吾輩は猫である』は漱石作品の特徴であるユーモアを継承している。私の読書の好みによれば、この種の作品が日常生活のストレス解消と気晴らしに絶好だと思う。

『千鳥』はロマンチックな初恋の話。このような作品を評価するということは漱石にも同じようなロマンチックな一面があったことをあらわしている。『虞美人草』では新しい女の藤尾よりも古い女の小夜子や糸子のほうが漱石の好みか。

どんぐりを拾って喜ぶ妻の思い出を描いた『団栗』の作者寺田寅彦は『吾輩は猫である』の水島



門弟篇

映画文学人生論

寒月や『三四郎』の野々宮宗八のモデルだ。水島寒月と金田鼻子、野々宮宗八と里見美禰子との縁談は、結局、まとまらないが、小説の筋の進行には重要な役割をはたしている。漱石は寒月や宗八が子連れだとは書いていないが、『団栗』を読むと、寅彦は実生活においては、いちど結婚して妻をなくし、子連れだったということがわかる。

『煤煙』はあきらかに漱石の作風とは異質だ。作者の森田草平は東京大学英文学科で漱石の教え子だが、『文学論』を真面目に受講したとは思えない。真面目に受講し、『文学論』を筆写して漱石に協力した中川芳太郎とは雲泥の差だ。英文学よりもロシア文学のドストエフスキーやイタリヤ文学のダヌンチオなどを読みふけた。そして、妻がいるのにもかかわらず、新しい女の平塚明子と心中未遂事件を起こし、漱石に迷惑をかけた。そんな男に心中未遂事件を題材にした『煤煙』を連載させただけでなく、朝日新聞文芸欄の実務担当者に起用したというところにも漱石の弟子に対する面倒見の良さがうかがえる。

「木曜日の午後三時からを面会日と定候」として、毎週木曜日に雑談をかわしながら、門弟たちの内発的開化をうながしたが、はたして門弟たちは師の期待に応える仕事をしたのだろうか。

此の下に稲妻起る宵あらん